

弾性包帯矯正法

医療法人(社) 日本鋼管病院
錠内 広之

【目的】

手関節・手指の他動的関節可動域改善訓練
手関節の屈筋・伸筋の持続的ストレッチ

【製作経緯】

当院は、骨折や神経麻痺等の整形外科的疾患の患者が多い。特にとう骨遠位端骨折が多い。その為、当時(20年前)より多くの患者に同時に対応でき、さらに効果的な関節可動域(以下ROM)訓練の方法はないかと検討し、この方法に至る。道具を主体とした今回のコンテストという趣旨では少し内容を逸していると思われるが、素材を生かした工夫と、訓練方法についての作業療法士の工夫を紹介したく、今回報告する。

【道具の機能性】

素材:(株)竹下製薬社製“ソフラットシーネ”を使用。これは、骨折時の添え木として使用する素材で、針金の枠をクッション材で覆ったものである。この素材を三角形に加工(手で折り曲げ可能)して、訓練台として使用する(以下三角台)。

訓練方法:上に挙げた三角台上に患者の前腕を乗せ、弾性包帯を巻く。訓練可能な運動は、手関節屈曲・伸展、手指MP関節屈曲である。方法についてはここでは詳しく説明できないが、三角台を使用する事で、統一した方法として考案する事ができた。

角度調節:三角台の手関節部に当たる部分は、90°に設定してある。また、手関節伸展時には、伸展角度の調整やMP関節が過度に伸展しない様に手背にクッションを挿入している。MP関節屈曲においては、別途スプリント材で加工した道具を併用して屈曲方向の調整が可能な様に工夫している。

【使用例】

<対象疾患1>

とう骨遠位端骨折、末梢神経麻痺、腱断裂等の整形外科的疾患によって、手関節周囲のROM制限を生じ

た疾患。

<対象疾患2>

脳卒中やパーキンソン病、あるいは上に挙げた整形外科的疾患による筋緊張の亢進や筋短縮によって、手関節周囲のROM制限を生じた疾患。

<使用におけるメリット>

徒手的な訓練と比較すると患者対応時間は短時間である。

同時に多数の患者に対応できる。

方法が統一されているので、訓練角度や訓練強度がセラピスト間で統一できる。

<使用方法>

弾性包帯矯正法は、暴力的なROM訓練の危険を含んでいるため、この訓練施行前には十分な前処置が必要である。一般的には以下の順で実施している。弾性包帯矯正法自体は1回5分~10分実施している。

ホットパック、過流浴等の物理療法 手関節の自動運動(くるりん手首) 弾性包帯矯正法 巧緻性訓練 抵抗運動訓練

<応用>

弾性包帯矯正法としては、三角台を使用したものの他に、肘屈曲・伸展、手指の屈曲等も弾性包帯を利用して訓練する事も可能である。

【効果】

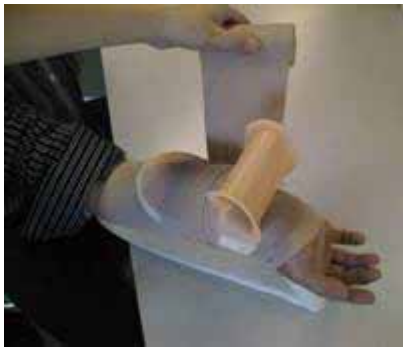
手関節のROM改善に有効である。手関節屈曲・伸展、MP関節屈曲における持続的ROM訓練としての効果が期待できる。関節拘縮の中でも、筋の短縮にはストレッチ効果も期待できる。脳卒中等における筋緊張亢進についての持続的效果については疑問が残るが、随意性向上を目的とした訓練開始前に実施する事で、その訓練効果が上がる期待はできる。



手関節屈曲



手関節伸展



MP関節屈曲



<応用>



手指屈曲



肘屈曲



肘伸展